

端 役 登 場 の 文 体

— 夕顔巻から玉鬘巻への右近の場合 —

加 藤 宏 文

はじめに

源氏物語の「作者」は、帚木巻の出發にあたり、「事實譚」を語り伝えた人を非難し、「譚」の世界そのものをも擲擯する立場を設定した。この立場の主を、ここでは、「話者」と呼ぶ。

この「話者」は、物語の時間的展開、すなわち、場面の展開の中で、対象人物とともに、自在に移動する。あるいは光源氏に添い、あるいは離れて突如六条御息所へ、などの類である。これらを、「視点の移動」と呼ぶ。

さらに、この「話者」は、ひとつには、自在に一対象人物とも交流をしたり、ふたつには、「筆録者」らにその立場を譲つたりもする。そんな力をも持たされている。これらを、「視点の転換」と呼ぶ。(A 図ⅠVを参照されたい。)

本稿では、この「移動」と「転換」などを、ひとりの端役を軸に見る。夕顔巻から玉鬘巻への右近をである。そこで、「作者」の玉鬘物語構想における「観点」の一端を、とらえてみたい。源氏物語文

一 視点の移動と転換

夕顔巻の冒頭は、光源氏とおぼしき一貴公子の、中宿り行の場面から始まる。二つの小場面に分ける。すると、対象人物・光源氏に添った「話者」の視点の移動が、よくわかる。

(1) 六条わたりの御忍びありきのころ、内裏よりまかで給ふ中宿りに、……五条なる家、たずねておはしたり。……見わたし給へるに、……あまた見えてのぞく。……思ひやるに、……心地ぞする。……やうかはりて思さる。(日本古典文学大系一一一)

二三〇以下同じ。)

(2) 御車も、いたくやつし給へり。……さきもおはせ給はず。……

A ……うちとけ給ひて、……少し、さしのぞき給へれば、……と、

C おもほしなせば、玉のうてなも同じことなり。切懸だつものに、いと青やかなるかづらの、心地よげにはひかかれるに、白

き花ぞ、おのれひとり、あみの眉開けたる。(同一一二三)

まず、(1)では、主人公の中宿りへの行動(傍線A)が、「話者」の視点の対象となり、出發する。「話者」も、「まかんで」、「五条なる家」へと、視点を移動させる。その上で、さらに、主人公の視点に添い、情景をとらえていく(B)。 「見わたす」目に、「さき」が「見えて」くる。そして、視点は、主人公に合わされ、その心理が開陳される(C)。一場面は閉じる。

表1

(注)

印が右近登場の場面。

夕顔巻

玉鬘巻

場面 展開	文番号	各文の中心対象(人)物	場面 視点人物
(1)	1	源氏	源氏
(2)	5	源氏	源氏
(3)	9	源氏	源氏
(4)	15	源氏	源氏
(5)	19	源氏	源氏
(6)	21	源氏	源氏
(7)	25	源氏	源氏
(8)	27	源氏	源氏
(9)	30	源氏	源氏
(10)	35	源氏	源氏
(11)	39	源氏	源氏
(12)	46	源氏	源氏
(13)	48	源氏	源氏
(14)	49	源氏	源氏
(15)	53	源氏	源氏
(16)	54	源氏	源氏
(17)	55	源氏	源氏
(18)	57	源氏	源氏
(19)	58	源氏	源氏
(20)	60	源氏	源氏
(21)	62	源氏	源氏
(22)	70	源氏	源氏
(23)	74	源氏	源氏
(24)	77	源氏	源氏
(25)	80	源氏	源氏
(26)	83	源氏	源氏
(27)	84	源氏	源氏
(28)	87	源氏	源氏
(29)	88	源氏	源氏
(30)	90	源氏	源氏
(31)	93	源氏	源氏
(32)	98	源氏	源氏
(33)	103	源氏	源氏
(34)	107	源氏	源氏
(35)	110	源氏	源氏
(36)	119	源氏	源氏
(37)	121	源氏	源氏
(38)	125	源氏	源氏
(39)	130	源氏	源氏
(40)	133	源氏	源氏
(41)	141	源氏	源氏
(42)	143	源氏	源氏
(43)	146	源氏	源氏
(44)	149	源氏	源氏
(45)	152	源氏	源氏
(46)	156	源氏	源氏
(47)	159	源氏	源氏
(48)	167	源氏	源氏
(49)	180	源氏	源氏
(50)	181	源氏	源氏
(51)	191	源氏	源氏
(52)	192	源氏	源氏
(53)	196	源氏	源氏
(54)	201	源氏	源氏
(55)	204	源氏	源氏
(56)	206	源氏	源氏
(57)	213	源氏	源氏
(58)	222	源氏	源氏
(59)	223	源氏	源氏
(60)	225	源氏	源氏
(61)	232	源氏	源氏
(62)	237	源氏	源氏
(63)	240	源氏	源氏
(64)	245	源氏	源氏
(65)	254	源氏	源氏
(66)	255	源氏	源氏
(67)	262	源氏	源氏
(68)	264	源氏	源氏
(69)	270	源氏	源氏
(70)	271	源氏	源氏
(71)	276	源氏	源氏
(72)	282	源氏	源氏
(73)	283	源氏	源氏
(74)	293	源氏	源氏
(75)	301	源氏	源氏
(76)	304	源氏	源氏
(77)	308	源氏	源氏
(78)	313	源氏	源氏
(79)	318	源氏	源氏
(80)	320	源氏	源氏

場面 展開	文番号	各文の中心対象(人)物	場面 視点人物
(1)	1	源氏	源氏
(2)	2	源氏	源氏
(3)	5	源氏	源氏
(4)	9	源氏	源氏
(5)	10	源氏	源氏
(6)	12	源氏	源氏
(7)	15	源氏	源氏
(8)	18	源氏	源氏
(9)	23	源氏	源氏
(10)	27	源氏	源氏
(11)	31	源氏	源氏
(12)	41	源氏	源氏
(13)	45	源氏	源氏
(14)	48	源氏	源氏
(15)	49	源氏	源氏
(16)	58	源氏	源氏
(17)	60	源氏	源氏
(18)	63	源氏	源氏
(19)	65	源氏	源氏
(20)	69	源氏	源氏
(21)	73	源氏	源氏
(22)	76	源氏	源氏
(23)	79	源氏	源氏
(24)	83	源氏	源氏
(25)	93	源氏	源氏
(26)	106	源氏	源氏
(27)	109	源氏	源氏
(28)	111	源氏	源氏
(29)	114	源氏	源氏
(30)	119	源氏	源氏
(31)	121	源氏	源氏
(32)	125	源氏	源氏
(33)	130	源氏	源氏
(34)	134	源氏	源氏
(35)	136	源氏	源氏
(36)	144	源氏	源氏
(37)	148	源氏	源氏
(38)	154	源氏	源氏
(39)	157	源氏	源氏
(40)	161	源氏	源氏
(41)	164	源氏	源氏
(42)	167	源氏	源氏
(43)	171	源氏	源氏
(44)	174	源氏	源氏
(45)	178	源氏	源氏
(46)	187	源氏	源氏
(47)	193	源氏	源氏
(48)	197	源氏	源氏
(49)	204	源氏	源氏
(50)	211	源氏	源氏
(51)	212	源氏	源氏
(52)	218	源氏	源氏
(53)	223	源氏	源氏
(54)	229	源氏	源氏
(55)	239	源氏	源氏
(56)	245	源氏	源氏
(57)	248	源氏	源氏
(58)	254	源氏	源氏
(59)	260	源氏	源氏
(60)	262	源氏	源氏
(61)	266	源氏	源氏

この、A・B・C三つの段階が、「話者」から始まる視点の、微視的なありようである。

つきに、(2)では、場面は、時間的にさかのぼる。その上で、(1)と同様に、三つの段階は経る。しかし、後半は、異質である。すなわち、「話者」の視点は、いっそう主人公のそれに融合し、一体となって、ひとつの判断とひとつの描写とに及んでいく(D)。深化がある。

この、(1)から(2)、AからDへの、「話者」の視点の移動と融合は、さらには、転換をも生み、いわゆる「草子地」へとも連接していく傾向にある。文体のひとつのありようがある。

(3) 霧のいと深き朝、いたくそゝのかされ給ひて、……うち嘆きつゝいでたまふを、中將のおもと、……御几帳引きやりたれば、御ぐしもたげて、見だし給へり。……やすらひ給へるさま、げにたぐひなし。廊の方へおはするに、中將の君、御とにも参る。……なまめきたり。見かへり給ひて、……引きす糸給へり。……と、見給ふ。(光源氏、中將の各一首略。D)をかしげなる侍童の、……朝顔折りてまるるほどなど、絵に書かまほしげなり。(同一—三三)

この場面では、「話者」の視点は、三人の対象人物の間を、まずは移動する(A)。その上で、つきには、六条御息所の視点に添い(B)、その下で、二人の対象人物の行動(a)が、とらえられ。しかし、この視点は、どうやら、以下のすべての行動(a)・心理(c)・判断(D)にまでは、及んではないようである。結びの判断(D)は、「話者」自身の視点である。つゞく場面は、「草子地」に転じる。

一方、玉鬘巻の冒頭は、末摘花巻の冒頭に似た夕顔追慕の一文を

経て、こう転換する。

(4) 右近は、なにの人数ならねど、……仕うまつり聊れたり。……そなたにさぶらふ。……心のうちには、「……」と思ふに、あかず悲しくなむ思ひける。……おもひつゝみ、……はゞかり聞えて、たづねもおとつれ聞えざりしほどに、……くたりにけり。(同一—三三九)

また、初瀬での再会の場面は、こうである。

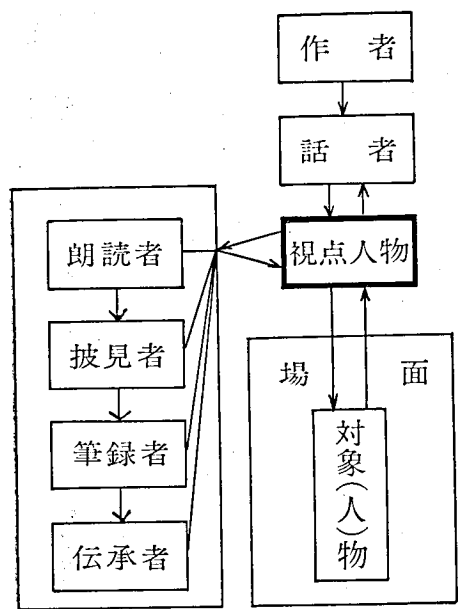
(5) この、来る人も、はづがしげもなし。いたく、かいひそめて、かたみに、心つかひしたり。さるは、かの、世とゝもに恋ひ泣く右近なりけり。……身を思ひなやみて、……たびく詣でける。……と思ひてものゝはさまよりのぞけば、この男の顔、見し心地す。……元見分かぬなりけり。……みれば、又、見し人なりけり。……憎くおぼゆるも、うちつけなりや。(同一—三四)

まず、(4)では、対象人物が、突然右近へと移動し、以下、その行動や心理が描かれていく(A)。視点も、右近からのそれへ転換する。ところが、この場面は、結びの一文の中ほどで、閉じる。乳母たち一行が、突然、代って対象人物となる(B)。視点も、以下、初瀬における劇的な再会に至るまで、十八年間、この乳母側に転換したまま、流離譚はつゞく。

つまり、玉鬘巻は、光源氏・右近・乳母たちの三つの視点の巧みな転換を骨組みとする。

つきに、(5)では、(4)において転換した乳母側の視点が、再び、大きく右近側にひきもどされる場面がある。劇的な再会の場面である。場面は、乳母側の視点が、右近を対象人物にして(A)始まる。

〔図一〕



そして、右近と一体となった(B)のち、また右近が対象人物となる(A)。ところが、「話者」は、以下、きっぱりと右近に視点を転換し切って語りつづけ、ついには、「話者」自身の視点(D)をあからさまにする。巧みな転換の接点が、ここにある。また、両巻には、つぎのような転換もある。

(6) 仮にても、宿れるすまひのほどを思ふに、「……」など、おぼすなりけり。惟光、「……」と思ふに、おのれも隅なきすき心にて、いみじくたばかり、惑ひ歩きつゝ、強ひて、おはしまさせそめてけり。この程の事、くだしくしければ、例のもらしつ。(同一一三五)

(7) 「かへさむといふにつけてもかた敷きの夜のころもおもひやるかな、ことわりや」とぞありける。(同一一三七四)

つまり、(6)は、「筆録者」、(7)は、「披見者」の、いずれも、前記の例とは別次元の視点への転換である。(6)のAからBへ、(7)のAへである。

すなわち、帯木巻冒頭の「話者」を、「作者」は、背後でこう制御する。ひとつは、「話者」・「視点人物」・「対象人物」三者の自在の交流と融合・転換、ふたつは、別次元に設定された、「伝承」・「筆録」・「披見」・「朗読」の担い手への転換である。まとめる。

△図一Vのようになろうか。

二 右近をとらえる視点

以上のような、「話者」の視点という観点から、夕顔巻・玉鬘巻をとらえる。すると、前者は、七十九の、後者は、六十の、それぞれ小場面に分けられる。これを単位に分析する。

まず、右の場面展開の欄に()印の番号で併記したのは、「日本古典文学大系」の記す小見出しの番号である。文番号は、通し番号である。つぎに、場面ごとに、文単位の中心対象(人)物を示し、さらに、場面の視点人物を示した。

一 覧すると、つぎの△表I Vのようになる。

さて、中で、ひとりの端役は、どのような視点でとらえられているであろうか。「変化に富んだ物語の進行上の役割、ただそのための女房」とか、「光源氏、右近の回想の連鎖から新たな物語が紡ぎ出される」とかとされる右近の登場のありようを、この観点から吟味してみる。概観しただけでも、二つの巻でのその違いは大き

い。以下、分析してみよう。

まず、夕顔巻においては、右近は、場面⑨において、惟光報告するところのある童への声の中にとらえられる。そして、以下、右近は、ほとんど、光源氏の視点のもとに、やがて「事件」に立ち会い、光源氏を相対化する。

たゞし、中で、場面⑩と⑪だけは、右の相対化の世界の中にあつて、一見奇妙に、視点人物を右近へと転換している。この自在な視点の転換の方法が、やがて、玉鬘巻においては、巻の構造の柱として、存分に生かされる。

また、この巻においては、右近にかかわつて、「話者」がその視点をあからさまにすることは、稀である。中で、たゞひとつの例は、場面⑫のそれである。そこでは、光源氏・惟光・右近を対象人物とし移動しつゞけた視点が、入りくんだ文脈の結びに、定着をする。

そして、右近は、場面⑬において、乳母子としての孤立ぶりが紹介され、ついには、「あさましく、ゆくへなくて」静かに退場する。状況を削り上げる役割は、ついに演じない。

一方、玉鬘巻においては、右近は、その登場ぶりにしてからが、夕顔巻とは異質である。すなわち、場面⑭において、「かいひそめたる」外見のみならず、その内面が、つぎに明かされる。六条院の「御殿うつり」を引き出す。

ところが、この場面は、前述のように、五番目の文の途中で、視点をがらりと転換する。玉鬘筑紫流離譚の突然の始まりである。以下、乳母側の視点からのこの世界は、場面⑮で右近をとらえ、場面⑯・⑰では、右近側に視点が再転換した中で、「話者」が顔をのぞ

かせる。

こうして、右近を視点人物に引きもどし、「話者」をそれに密着させる中で、「作者」は、慎重に、玉鬘を光源氏に近づける計算をする。そこには、偶然の条件にとどまらない、右近の独立した内面の世界が、与つて自律化する。

しかし、右近は、場面⑯を境にして、その自律性を失い、場面⑰において、対象化され、やがて、胡蝶・篝火・真木柱各巻での散見に至るまで、静かに姿を隠しつづけるのである。

このような視点を整理すると、こうなる。
 △右近は、どの視点人物のもとに登場しているか。▽

〈表2〉

視点人物	巻	
	夕顔	玉鬘
話者	1	3
右近	2	13
源氏	14	8
一行	/	1
玉鬘	/	2
豊後介	/	1
人々	1	1
女房など	1	/
惟光	3	/
大徳	1	/
夕顔のやどり	1	/
場面合計	24	29

この、右近が玉鬘巻において持つに至つた自律性は、同じ巻の端役、たとえば、兵部の場合と比べると、より明確になる。

⑮ その夜、やがて、おとゞの君、^Aわたり給へり。兵部など、むかしの、光源氏などいふ御名は、^B聞きたてまつりしかど、年頃のうひくしさに、さしも、思ひきこえざりけるを、^Bほのかなる御とながらに、御几帳のほころびより、^Bはつかに見たてまつる。いと、めづらかに、^B恐ろしうさへぞ思ゆるや。同(二一三六五)この場面⑯は、光源氏の登場をもって出発する(A)。ところが、

対象人物は、突然兵部に移動する。そして、以下、兵部が、一見視点人物へと転換されていき、結びでは、それがいつそうあからさまになる(B)。ところが、この場面の後半の視点は、光源氏に再転換する。兵部は、光源氏を相対化したにすぎない。

三 右近と地の文

さて、△表2Vで見たように、夕顔巻から玉鬘巻へと、右近をとらえる視点は、大きく変化する。ひとつは、「話者」、ふたつは、右近自身の、それぞれ視点にかかわってそうである。

⑤ 苦しき御心地にも、かの右近を召し寄せて、局など、ちか／＼給ひて、さぶらはせ給ふ。惟光、……もてなし助けつゝ、さぶらはす。……程なく、まじらひつきたり。服いと黒うして、かたちなどよからねど、かたはに、見苦しからぬ若人なり。(同 一一一六三)

まず、夕顔巻、場面⑤。対象人物は、光源氏から惟光を経て、右近へと移動する(A・B・C)。その移動の中で、いずれの文においても、右近をかかわらせつゝ、Dに至っては、視点は、「話者」自身の目へと落ちついている。

⑥ 「いでや、身こそ数ならねど、殿も、……となむ、の給はずる」といふ。……など、うち語らひつゝ、日一日、むかし物語しくらす。(同 二一三五三)

また、玉鬘巻、場面⑥。こゝでは、右近と乳母との対話がうちつゞく。中で、右近の近況報告、乳母の、玉鬘についての現実的認識。さらに、右近の弁明。そして、視点は、Bに至って、大きく「話者」の目へと落ちつく。

ところで、「話者」の視点が、その心に合わされる例は、夕顔巻にはなく、玉鬘巻に二例を数えるだけである。第一章に示した、(4)

・(5)、すなわち、場面⑥が、それであった。

⑥ 御車いれさせて、……立ち給へり。右近、艶なる心地して、来し方の事ども、人知れず思ひ出でけり。……この御有様、しりはてぬ。ほの／＼と、物見ゆるほどに、おり給ひぬめり。かりそめなれど、清げにしつらひたり。(同 一一一四三)

さて、夕顔巻、場面⑥。対象人物は、光源氏が始まり(A)、右近に移動し(B)、ついに、光源氏の某院への到着のさまが、その右近の目からとらえられ(C)、相手は相対化される。

⑦ 夕暮のしづかなるに、空の気色いとあはれに、御前の前裁かれん／＼に、虫の音も鳴きかれて、紅葉の、やう／＼色づくほど、絵に書きたるやうに、おもしろきを、見わたして、「……」と、かの夕顔のやどりを、思ひ出づるも、はづかし。(同 一一一六八)

また、夕顔巻、場面⑦。二条院に「まじらひつゝ」いた右近の心が、院のたたまいを、五条の宿にひき比べて慨嘆する。この視点が、ありようは、ひきつゞく場面⑦で、同じ景に心を入れる光源氏を、これもまた相対化する。

⑧ からうじて、「……」とて、より来たり。あ中びたる振練に、絹など着て、いといたく、ふとりにけるに、わがよはひよりも、いと、おぼえて、恥づかしけれど、「……」とて、顔をさし出でたり。この女、……泣く。……いと、こよなくあはれなり。(同 二一三四六)

つぎに、玉鬘巻、場面⑧。右近と三条との劇的対面の場面であ

る。右近の目の視点(B)によってとらえられていた三条(A)は、右近をして、しみじみとした感慨にふけらせる。そして、結びの一文は、右近の心の視点(C)そのままである。「話者」の視点は忘れられる。

㉗ 「まづ、おとどはおはすや。わか君はいかゞなり給ひにし。
A「あてき」と聞えしは」とて、……はかなき世を思ふに、……
A言ひ出です。「……」とて、いぬ。みな、驚きて、「……」
「……」とて、この隔てによりきたり。(同二一三四六)

また、ひきつゞく、玉鬘巻、場面㉘。右近の心(A)、三条の行動(B)、乳母や兵部の反応(C)と会話、そして、行動(C)が、右近の目の視点によって、とらえ結ばれる。

以上、両巻における、右近をとらえる視点の変化を、「話者」および右近自身のそれとのかゝわりで、具体的にとりあげ、吟味した。かゝわるすべての例を整理すると、こうなる。

<表3>

視点		巻	
話者	右近	夕顔	玉鬘
目	目	⑥⑥	③⑤
心	心	②④⑤	⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
心	心	⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿	②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

⑬・印は「草子地」とされる例。

なお、かゝわって、古来、「草子地」などとされている箇所をとりあげ、吟味してみよう。

㉘ ……「かくいふ我(が)身こそは、え生きとまるまじき心地すれ」と、の給ふも、たのもしげなしや。(一一一六一)
まず、夕顔巻、場面㉘の一部。夕顔巻で、右近にかかわる「草子

地」は、ここだけである。「右近が身になりては、」「草子の地にか」と、『岷江入楚』の注は、ひかえ目である。

一方、玉鬘巻では、前掲の場面㉘・㉙。「話者」の視点でとらえられた場面の、焦点の箇所がまずそうである。以下、こうもある。

㉚ あけぬれば、知れる大徳の坊におりぬ。「物がたり心やすく」となるべし。(二一三五一)

これは、玉鬘巻、場面㉚の一部。右近の行動について、その理由を「話者」の視点から、自信をもって推し量った箇所である。

㉛ 右近は、大殿へまゐりぬ。「このことを、かすめ聞ゆるついでもや」とて、いそぐなりけり。(二一三五五)

これも、玉鬘巻、場面㉛の一部。同様の例。

㉜ ……いまは、おほやけに仕へ、いそがしき御有様にもあらねば、世(の)中(の)どやかに思さるゝまゝに、たゞ、はかなき御たはぶれ言をのたまひ、をかしく人の心を見給ふあまりに、かゝる古人をさへぞ戯れ給ふ。(二一三五七)

これも、また、玉鬘巻、場面㉜の一部。これは、女房たちの「しのび笑」にもかゝわらず、右近が、光源氏の「御足まゐり」に召された箇所で、玉鬘と光源氏との結びつきへの計算のひとつである。「話者」の解説としたか。

以上、いわゆる「草子地」と右近とのかゝわりにおいても、玉鬘巻への傾斜が見られる。

このように、右近は、地の文の次元での視点にかゝわって、玉鬘巻へと大きく変貌する。すなわち、夕顔巻での、光源氏相対化の役目から、自らの視点で状況を外的・内的に伐り拓いていく、自律的存在となりえたのである。

四 右近と会話文・内語文

このような、地の文における視点のありようは、かゝわって、右近の人物造型にどのように反映しているか。右近の会話文・内語文における視点のありようを、吟味してみる。

まず、会話文においては、それを、状況への対応のあり方、すなわち、語り出しの一文に特徴を求める。と、つぎの二つになる。

④ 頭括型

状況、特に対話の相手の要求に、結論をまず示して出発する型。

⑤ 尾括型

状況、特に対話の相手の要求には、結論は末尾まで留保する型。

すなわち、④ 頭括型は、ある意味では、状況や要求への対応に、客観的にも心理的にも、選択の余地が、あまりない場合である。それに対して、⑤ 尾括型は、たとえ窮地に陥っていても、迂余曲折のち結論が醸し出され、新たな状況が伎り拓かれる場合である。

④ 「いかでかまからむ。暗うて」(同一一四七)

⑤ 「いと、うたて。みだり心地の悪しう侍れば、うつぶし臥して侍るなり。御前にこそ、わりなく思さるらめ」(同一一四八)

⑥ 「しか。一昨年春ぞ、ものし給へりし。女にて、いとらうたげになん」(同一一六七)

⑦ 「さらば、いと嬉しくなん侍るべき。かの西の京にて生ひ出

で給はんは、心苦しくなむ。「はか／＼しくあつかふ人なし」

とて、かしこになん」(同一一六七)

まず、夕顔巻の会話文における④頭括型。場面⑧。拒否が先行し、根拠が補足される。場面⑨。まず、状況に反発する。場面⑩の二例。肯定、受容の即答が、語り出しとなる。前者は、光源氏からの、玉鬘の存在にかかわる詰問に対応するものであり、後者は、光源氏の、玉鬘招聘提案に対応するものである。他に四例ある。

⑧ 「いと、いたうこそ、ゐ中びにけれな。中将殿のむかしの御おぼえだに、いかおはしまし。まいて今は、天の下を御心

にかけたまへる大臣にて、いかばかりいつかきし御中に、御か

たしも、受領の妻にて、品定まりておはしまさむよ」(同一

三五〇)

⑨ 「まかで、七日に過ぎ侍れど、をかききことは、侍りがた

くなん。山踏し侍りて、哀なる人をなん、見給へつたりし」

(同一一三五六)

⑩ 「あやしき山里になん。むかし人も、かたへは交らで侍りけ

れば、その世の物語し出で侍りて、いと、堪へがたく、思ひ給

へられし」(同一三五八)

⑪ 「たゞ、御心になん。おとゞに知らせたてまつり給はむこと

も、誰かは、伝へほめかききこえたまはむ。いたづらに過ぎ

ものし給ひしかはりには、げに、ともかくも、ひき助けさせ給は

んこそは、罪かるませ給はめ」(同一三五九)

つぎに、玉鬘巻の会話文における⑤尾括型。場面⑫。「受領の北

の方」礼賛の三条への反発、咎めだてが先行し、根拠が補足され

る。場面⑬。光源氏の戯れ言に対して、生真面に否定する。場面

⑭。光源氏の追求に対する、とりつくろった即答。場面⑮。同要求

る。場面⑯。光源氏の追求に対する、とりつくろった即答。場面⑰。同要求

る。場面⑱。光源氏の追求に対する、とりつくろった即答。場面⑲。同要求

の受容。他に五例ある。夕顔巻と、ほぼ同数である。

⑭ 「物おちをなん、わりなくせさせ給ふ御本性にて、いかに思
さるゝにか」(同一一四七)

⑮ 「年頃、幼く侍りしより、片時、たち離れたてまつらず、馴
れ聞えつる人に、にはかに別れたてまつりて、いづこにか帰
侍らん。「いかになり給ひにき」とか、人にもいひ侍らむ。か
なしきことをば、さるものにて、人にいひさわがれ侍らんが、
いみじきこと」といひて、泣き惑ひて、「煙にたくひて、した
ひ参りなん」(同一一六一)

⑯ 「この方の御好みには、もてはなれ給はざりけり」と、思
ひ給ふるにも、口惜しく侍るわざかな」(同一一六九)

これらは、夕顔巻の会話文における⑭尾括型。場面⑭。「われか
の気色」の夕顔の「本性」を説いた上での懸念の表明。場面⑮。自
らの運命の絶望視。その根拠としての「人」意識。その上での決
断。場面⑯。覚醒ののちの悔恨。夕顔巻におけるこの例は、右の三
つである。

⑰ 「おぼえぬ高きまじらひをして、多くの人をなむ見集むれ
ど、「殿のうへの御かたち似る人はおはせじ」となん、年ご
ろ見たてまつりつるを。又、おひ出で給ふひめ君、御さま、いと、
ことわりに、めでたくおはします。かしづきたてまつり給ふさ
まも、並びなかめるを。かく、やつれ給へる御さまの、おと
り給ふまじく見え給ふは、ありがたくなむ。おとゞの君、父み
かどの御時より、そこの女御・后、それより下、はた、残る
なく見たてまつり集め給へる御目にも、「当代の御母きさきと
聞えしと、この姫君の御かたちとなむ、『よき人とは、これを

いふにやあらむ」とおぼゆる」と、きこえ給ふ。みたてまつり
ならぶるに、かのきさいの宮をば、え知りきこえず、姫君、い
と清らにおはしますめれど、まだ、かたなりにて、生先ぞ、お
しはかられ給ふ。

さて、うへの御かたちは、「なほ、たれか、たち並び給はむ」
となん、見え給ふ。殿も、「すぐれたり」と、思したるを、
言にいでは、何かば、かぞへのうちにはきこえ給はん。「わ
れにならび給へるこそ、君は、おほけなけれ」となむ戯れきこ
え給ふ。見たてまつるに、命のぶる御有様どもを。「又、さる
たぐひおはしましなむや」と思ひ侍るに、いづこかおとり給は
む。ものは、かぎりある物なれば、勝れ給へりて、いたゞき
を離れたる光やおはする。たゞ、これを、「すぐれたり」と、
聞ゆるなめりかし」(同一一三五)

この最も長い例は、玉鬘巻の会話文における⑰尾括型。初瀬での
劇的な再会直後の、乳母たちを前にしての述懐である。(1)紫上最
高。(2)明石姫君も「めでたし」。(3)紫上への「かしづき」も「並び
な」し。(4)玉鬘も劣らず。(5)源氏は、藤壺・明石姫君を理想とす
る。(6)明石姫君の「生先」「おしはかられ」る。(7)紫上最高。(8)源
氏は、紫上を数に入れない。(9)紫上は、身分不相応。(10)源氏と紫上
とを見ると「命のぶ」。(11)玉鬘は、紫上に劣らない。(12)とび離れた
美人はいない。(13)玉鬘を、美しさ「すぐれたり」と言うのだ。――
この、一見無原則に揺れ動く右近の心も、実は、尾括の一文に向け
てのそれであったことがわかる。玉鬘巻におけるこの類型例は、夕
顔巻の三倍を越す。

以上、両巻における会話文の⑭・⑯二つの類型の数を場面番号で

一覧すると、こうなる。

〈表4〉

B 型	語り出し	
	A 型	巻
3	8	夕顔
④⑤ ⑥⑦	⑧⑨ ⑩⑪ ⑫⑬	玉鬘
10	9	
⑭⑮ ⑯⑰ ⑱⑲ ⑳㉑	㉒㉓ ㉔㉕ ㉖㉗ ㉘㉙	

つぎに、内話文においても、会話文における類型に準じて、それを、状況への対応のあり方、すなわち、発想の一文に特徴を求める。

㉑ 頭括型 ㉒ 尾括型

まず、夕顔巻の内話文における㉑頭括型。

㉑ これも、「恐ろし」と思ひたるさまにて、まゐり寄り。

(同一一四六)

㉒ (前略。) 見わたして、「心より外に、をかしまじらひかな」と、かの夕顔のやどりを、思ひ出づるも、はづかし。(同一一六八)

㉓ (前略。) と、ひとりごち給へど、え、さしいらへも聞えず、「かやうにて、おはせましかば」と思ふにも、胸ふたがりておぼゆ。(同一一六九)

場面㉔。「御枕上に、いと、をかしげなる女」の見えた直後。光源氏の視点からの「さま」の内面である。場面㉕・㉖。ともに、二条院に「まじらひつ」いたのちの内面描写である。

つぎに、玉鬘巻の内話文における㉑頭括型。

㉗ (前略) などいふを聞くに、「我(が)なみの人にはあらじ」

と思ひて、ものゝほさまよりのぞけば、この男の顔見し心ちす。(同一三四五)

㉘ 「物がたり心やすく」となるべし。(同一三五二)

㉙ 「このことを、かすめ聞ゆるついでもや」とて、いそぐなりけり。(同一三五五)

場面㉚・㉛・㉜、いずれも、短くとも、状況によく対応した、ひとつの判断が、直接描写されている。夕顔巻の消極性は、ない。

つぎに、夕顔巻の内話文における㉒尾括型。この類型の例は、皆無である。注目される。

最後に、玉鬘巻の内話文における㉒尾括型。

㉝ 「かく、あやしき身なれど、たゞ今の大きおほい殿にさぶらひ侍れば、かう、かすかなる道にても、一らうがはしきことは侍らじ」となん、頼み侍る。ゐ中びたる人をば、かやうのところに、よからぬ者どもなどの侮らはしうするも、かたじけなきわざなり」とて、物語、いとせまほしけれど、(後略。)(同一三四九)

㉞ 「かたちは、かく、いとめでたく、清げながら、ゐ中び、こちん／＼しくおはせましかば、いかに、玉のきすならまし。いであはれ。『いかで、かく、おひ出で給ひにけむ。』」と、おとゞを、うれしく思ふ。(同一三五四)

㉟ かの人を、「いとめでたし。劣らじ」と、見たてまつりしかど、思ひなしにや、なほ、こよなきに、「さいはひの、あるとなきとは、隔てあるべきわざかな」と、思ひ合はせらる。(同一三五六)

場面㊱。初瀬における玉鬘一行のおぼつかなき。それへの懸念を、自らの幸いと比較し、相対的に照らし出し、煎じつめていく。

場面。仮想から現実へ。場面。かつての玉鬘評価の再確認から出発しながら、紫上を前にして、それは、ゆらぎを見せる。慎重になる。

以上、両巻における内話文の(A)・(B)二つの類型の数を場面番号で一覧すると、こうなる。

<表 5>

B 型	発想 / 卷	
	A 型	夕 顔
0	6	夕 顔
	(46) (49) (55) (67) (70) (71)	
10	8	玉 鬘
(22) (2) (25) (27) (28) (29) (30) (31) (31)	(41) (25) (27) (32) (34) (37) (38)	

まず、会話文。夕顔巻での右近は、主として光源氏の視点のもとに、その行動が見え隠れするにすぎなかった。そのことが、(A)頭括型を基調とする文体に現われている。それに対して、玉鬘巻での右近は、対乳母、対玉鬘、対光源氏を意識し、慎重に、玉鬘を六条院の人たらしめる。(B)尾括型の増加にかかわる。

一方、内話文。夕顔巻での右近は、(A)頭括型に終始し、(B)尾括型は、皆無である。それに対して、玉鬘巻での右近は、むしろ(B)尾括型への傾斜を見せる。しかも、場面(B)を除いては、すべて、話者ないしは右近自身を視点人物とする。両巻での、顕著なちがいである。

すなわち、一介の端役として、夕顔巻に登場した右近は、状況の相対化に活躍した。それから十八年、「作者」は、この右近を、右の文体の中に再生させ、玉鬘物語を始発させた。

お わ り に

ひとりの端役が、さりげなく登場する。そのさりげなさの中に、「作者」は、なみなみならぬまなざしを注いでいるようである。そのあり方は、「場面」をとらえる「視点」にかかわって大きい。ひとつの文体をなしている。

たとえば、この右近。夕顔巻における対象人物が、玉鬘巻での視点人物に変貌する。ひとりの端役が、源氏物語構想のうねりの中で、「作者」のまなざしを熱く受け、相対化する側からされる側、拓く側に立った例である。

この、右近における文体の特徴は、右近自身の会話文や内話文にも、かかわって、違った形で表れる。この内面の自律化も、「作者」のまなざしが賦与した「視点」を前提にしている。

源氏物語には、この右近のような、いわゆる女房たちを初めとした、さまざまな端役が、登場しては消えていく。その残しゆく軌跡は、「作者」独創の文体として、ひとつひとつが生き生きとしている。究めつづけたい。

注 1 藤井貞和「『草子地』論の諸問題——物語世界の語り手」

(学燈社「国文学」二二一)に、「岷江入楚」の桐壺巻末注記をふまえたまとめがある。

2 秋山慶「女房たち——バイプレーヤーとしての活躍ぶり——」(角川書店「日本古典鑑賞講座第四巻『源氏物語』」)。

3 三谷邦明「玉鬘の流離あるいは叙述と人物造型の構造」(笠間書院『源氏物語の表現と構造』)。

4 『岷江入楚』および『湖月抄』とりあげる箇所によった。井爪康之「岷江入楚および湖月抄の草子地について——岷江入楚を中心にして——」(『中世文芸』35)。

(一九八一・一〇・三記)

大阪府立豊中高校